

ことから、この城を重要視していたのがわかります。

家康は、慶長8（1603）年に征夷大將軍となり、江戸に幕府を開いて江戸時代が始まります。

城の場所・規模と歴代藩主

中世の関宿城は、利根川と江戸川をつなぐ逆川沿いに築かれていたと伝えられています。が、築城時にはまだ江戸川も逆川



棒出しと関宿関所の模型（写真提供：関宿城博物館）

も開削されてなく、利根川も常陸川という名の細流で、これらの河川が広がり城を囲み外堀として機能するようになったのは、築城から180年ほど後のことだといわれています。

家康に命じられた関東代官頭の伊奈忠次が三代にわたって利根川を東へ移す治水事業を完成、江戸川と逆川の開削によって城の三方を川が囲む立地となり、攻守においてその利点を発揮するようになりました。

近世関宿城の場所は関宿町久世曲輪（くぜくるわ）一帯で、関宿城趾の記念碑が建っているところに本丸があったと伝えられています。

面積は、本丸（城の中心で城主の居所）約5千坪、二ノ丸（本丸の外側の城郭）約4千500坪、三ノ丸（二ノ丸の外側の城郭）約4千500坪、内堀（城に巡らした二重の堀のうちの内側）約3千600坪、外堀（二重の堀のうちの外側）約6千350坪、その他約7千500坪といわれ、主郭には本丸、二ノ丸、三ノ丸のほか、発端曲輪（はつたんくるわ）、天神曲輪（てんしんくるわ）と呼ばれる区画がありました。

本丸には江戸城の富士見櫓を模したとされる御三階櫓（ごさんかいぐら）と呼ばれた天守閣があり、防衛対策として二ノ丸と三ノ丸の周りには多くの堀がはりめぐらされました。

藩主は270年あまりで8家23代に渡りますが、なかでも久世氏の治世が10代と最長で、幕府の要職も兼任し幕政に深く関与しました。



関宿あおぞら広場には棒出しに使われたといわれる石が残ります

水運の要衝―川関所

利根川の東遷事業にともなう、幕府は関東の河川を関宿に集め、水運の中心として関所を開設しました。河川交通の重要拠点となった関宿には大型船「高瀬船」が航行し、商人によって多くの物資が運ばれ、旅人が行き交うことで急激な発展を遂げます。流域には「河岸」と呼ばれる川の港が開かれ、野田の主要産業である醤油の蔵が建ち、各種問屋や旅籠、茶店が軒を連ねました。

関所の取締りでよく「入り鉄砲と出女」といわれますが、江戸に武器が入ることと人質である大名の妻子が国元に逃げることを防ぐため、関宿関所でも水上、街道において厳重に取締りが行われました。

箱根同様「最重要関所五十三」のひとつとして、江戸の警備と流通の一端を担っていたのです。

水量調節の堤―棒出し

江戸時代も中期から後期になると、浅間山の大噴火の影響で天明の大飢饉をはじめとする大規模な飢饉や洪水が各所で起こります。関宿でも城を取り囲む河川は繁栄をもたらす一方、たびたび洪水を起